

# 新聞新報

2005年(平成17年)1月4日 火曜日

## 「恐怖」「感謝」は風化せず

### 阪神大震災の「記憶度」調査

神戸大・本社

神戸大学と読売新聞社が尋ねたところ、「そう思は、神戸市、大阪市、横浜市」と答えたのは、横浜市民50%、大阪市民37%、神戸市の被災者は20%だった。調査は昨年十月、神戸市、長田、灘、西の三区と大阪市の、首都圏で神戸と共通点多い横浜市から、無作為

るアンケート調査を実施した。「被災した」と回答した千七百七十五人を対象に、震災直後と現在で「強く思う度合いを比較した結果、揺れの恐怖や支援への感謝などで強く記憶が残っていることがわかった。一方、「被災していない」千七百七人と合わせた回答者全員に、阪神大震災クラスの地震が十年以内に来ると思う

で選んだ十六歳以上各千人に郵送で実施した。回収率約45%。「被災した」千七百七十五人について、現在、「強く印象に残っている」と答えた数を、震災直後に「強く感じた」と答えた数で割った「記憶度」(%)として数値化した。

その結果、「とにかく命が助かってよかった」「水、電気、ガスがなくて困った」「地震の最初の揺れが怖かった」の三項目が当時78%以上、現在も56%以上が強く感じ、記憶度77-69%。

「近所の協力」「ボランティアの支援」「行政の支援への感謝」「消防や救急が来ないことを残念に思った」は震災当時39-18%だったが、記憶度79-68%で、感謝や不満の感情は根強く残ることを示した。

一方、「自分や家族の身を守ろうと必死になった」「前向きに乗りきるしかない」「被害が出て悲しかった」「みんな被災者という気持ちで助け合った」などは、当時は64-46%が強く感じたが、記憶度63-55%だった。